

## 一つに結び合わせる神の力

著者	原田 浩司
雑誌名	大学礼拝説教集
号	17
ページ	70-74
発行年	2013-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024641/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024641/</a>

# 「一つに結び合わせる神の力」

大学宗教授任 原 田 浩 司

## マタイによる福音書、第一章三―六節

3 ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。4 イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とお造りになった。」5 そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。6 だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

去る二〇一一年にメキシコ市議会で、離婚の手続きにかかる面倒を省くために、二年間の期限を付けた「仮結婚」の許可を認めるよう要請する法律の改革案が議会に提出された、とのニュースがありました。メキシコでは、結婚したカップルの約半分近くが離婚してしまう、しかも、その大半が結婚から僅か二年以内にしてしまうそうです。そうした現状を反映して、この議案が提

出されたというのです。現状に合わせたかたちでの法改正なのですが、法律そのものに問題点や欠点があつて改正をするならなら違和感はありませんが、このニュースには、何ともしっくりこない、腑に落ちない点があるのではないかと思われました。この法律の改正案自体も奇妙ですが、それにも増してメキシコにおける離婚率の高さには改めて驚かされます。

さて、学生の皆さんは、仕事に就いて収入を得ているわけではありませんから、自分の「結婚」ということについて考えるのはまだまだ先で、皆さんの目下の意識にあるのは、この大学でしっかりと無事に単位を取つて卒業し、就活戦線を乗り越えること。それが皆さんが意識している現実的な課題だと思います。他方で、こんなニュースも目にしました。それは今春、九州大学で半期の「婚学」という新しい講座が開講されたというのです。しかも、これが何年生向けの講義かというと、「一年生」を対象とした講義だということです。「教養選択科目」ですが、想定していた数の五倍もの受講希望者で、この講義はとても賑わつたそうです。これは大学一年生でも結婚について考えようとの積極的な意識が高いことも示しているでしょう。

皆さんの人生は大学を卒業してからも続いていきます。学生の皆さんはやがて卒業し、社会人となり、やがては結婚を現実的に意識する時も来るでしょう。この十年余り、日本では経済状況等が反映して、晩婚化が進んでいることも皆さんもニュースで聞いたことがあると思います。で

すから、皆さんが二〇代で結婚するのか、三〇代で結婚するのか、四〇五〇代になるのか、それとも結婚しないのか、それは誰にも分かりませんし、他ならない皆さん自身も「自分がいつ結婚するか」など、まったく分からないことです。しかし、学生たちの間では、自分の将来を見据えて、結婚について学生の時代からしっかりと考えておきたいという意識は、先ほど紹介した九州大学の例が示すように、とても高いものであると思います。

そこで、改めて今日の聖書の言葉、特に一つの言葉に集中します。それは「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」です。短い言葉です。しかし、結婚について大切なことが示されています。ここに「男は」とありますが、なにも男に限ったことではありません。「人は父母を離れて、夫と、または妻と結ばれ、二人は一体となる」と言った方が、現代においてはより適切でしょう。この言葉が示している第一のこと。それは「結婚の目的」です。「結婚したい」と思う気持ちがあっても、そこで、何のために結婚をするのか、一度立ち止まって是非考えてみましょう。

先日、「体育の日」の祝日のことですが、土樋キャンパスの礼拝堂で、本学の卒業生の結婚式を執り行いました。結婚式は教会で行うのは、西欧諸国では当たり前ですが、日本でも近年、キリスト教式の結婚式を挙げるカップルが増えています。ある本の中で、結婚をしたいと望むカップ

ルと、結婚式の司式を依頼され牧師の間で交わされた、こういう話を目にしました。

ある牧師のところに、教会で結婚式を挙げたいと希望するカップルが相談に来たそうです。「この人と結婚をしたいので、結婚式を挙げてください。よろしくお願いします」。すると、その牧師がカップルにこう尋ねました。「お二人は何のために結婚するのですか?」。このカップルは二つ返事で「いいよ」と承諾してもらえるところばかり思っていたので、率直に答えました。「わたしたち、互いに好きで、愛し合っているからです」。すると、この牧師が聞き返します。「そうですか。では嫌いになつたらどうするのですか?」。カップルはこたえました。「嫌いになんてなりませんし、もし嫌いになつても分かれたりしません」。すると牧師が更に尋ねる。「そんなことはないでしょう。相手が好きだから一緒にになりたいのなら、嫌いになつたら別れたいと思うのが自然じゃないですか?」。牧師はこの面接の後、結局、このカップルの結婚式の司式を引き受けることを辞退したということです。

さて、この牧師は何も意地悪をしているわけではありません。「結婚」には、自分の、また自分たちの期待や願望や理想どおりに行かないことがあります。そういうことの方が多いかもしれません。改めて考えたい。何のために結婚するのか? 皆さんもいつかそう自分に問いつく時が来るでしょう。皆さんは聖書を手掛かりにして、この点について考えることができるでしょう。今日

の聖書の言葉には「父母を離れ、二人は一体となる」とありました。結婚とは人生を共にし、互いの人生を分かち合うことです。一緒に生きること、それは一体となつて生きることです。自分の願望や期待、また理想が崩れた時が来ても、夫が妻に、妻が夫に対して言うべき言葉は何でしょう。それは相手を責める言葉ではないはず。それは「あなたが共にいてくれる。それだけで私は嬉しい」。この素直な思いと言葉が大切です。「あなたが共にいてくれる」。それが嬉しい。それは、実は神がわたしたちに語りかける言葉です。聖書が、主要なテーマとして一貫して語り続けるのが「神と人間との関係」です。神にとって、あなたがいてくれること、それが喜びです。神は「共に生きる、一緒に生きる」ことを求め、望み、欲しておられる。共に生きる。それが神と人間との関係であり、わたしたち人間同士の関係です。そして、「一つに結び合わせる」。それは、私たちの力で成し遂げることにほるかに増して、実は神に由来する力です。それこそが、聖書が私たちに語りかける愛の力です。

学院大学での学生生活を通して、そして大学礼拝を通して、結婚ということに関しても、皆さんには学識としてだけでなく、一つに結び合わせる神の力、愛の力を、ぜひとも養っていただきたいと思います。